

## I 特別活動における自律した学習者の姿

- 手順や深まりのある話合いの進め方を理解し、自律的に話合いを進め合意形成したり、課題の解決方法について多様な意見のよさを生かして意思決定したりする姿
- 自分たちの思いや願いを実現するために学級活動を有効に活用しようとする姿

## II 授業デザインの取組

- 自分やグループの考えを整理・分析したり、みんなで考えを共有したりする場を設ける。
- 合意形成や意思決定を支える、よさや改善点を見付ける活動を行う機会を設ける。
- 自分たちの現状を把握し、話し合いたいことを募集し切実感のある議題や課題の選定を支援する。

## III 1年次に生成した仮説

### 1 成果

相手意識をもって献立づくりに取り組み、相手が喜ぶような工夫を取り入れて献立をつくらうとした姿



6年生が喜ぶような献立にできるように目的を共有する時間を設けたことや、自分たちが考えた献立が好きではない人たち、アレルギーをもった人たちにも喜んでもらえるような工夫ができないか考えるよう働きかけた。

5年「6年生 卒業お祝い給食をつくらう」では、自分たちの力でセレクト給食を復活させたいという思いから単元を始めた。実施できるのが2、3月の卒業間近であるため、これまで全校のために頑張ってくれた6年生が喜ぶような献立をつくりたいという目的を共有した。その目的意識をもったからこそ、6年生が好きな給食メニューを知りたいという思いからアンケートを作成し、依頼しに行く姿が見られた。また、実際の献立づくりの場面では、カレーライスが苦手な6年生が楽しんで給食を食べられるようにするために、カレールーの中に星形やハート形にした人参を少量入れて、入っていたら当たりというゲーム要素を取り入れる姿があった。本時でも自分たちが作成した献立が本当に6年生に喜んでもらえるのか、粘り強く考える姿が見られた。相手意識をもつこと、少数派の人たちにも目を向けることで、よりよい献立にしようとする姿が実現された。

相手意識のもとに、調査活動や提案の仕方・見せ方を考えることで自分たちの主張を強くした姿



ICT機器を活用しながら、アンケートやインタビューの結果をプレゼンテーションにまとめ、自分たちの提案の根拠を明らかにしたり強化したりするよう働きかけた。

6年「思いをカタチに、6Cプロジェクト」では、年間を通して児童がもつ学級の課題ややってみたいことを議題として募集し、提案者による提案理由や、話合いの目的を全体に周知して多様な方法で学級会を繰り返してきた。総合的な学習の時間の経験を活かしたり、ICT機器を効果的に活用したりすることで、児童の話合いのスキルが高まっていく姿が見られた。本時では「他学年と交流する」というテーマのもと、何をしたいか考えるときに、「対象学年の人は何がしたいのだろう」ということに疑問をもって、アンケートを採った。また授業を見に行く調査活動を行うことで、自分たちの提案に対する思いが深まった。また、提案の際に行うプレゼンテーションの準備をして、参会者に自分たちの思いを届け、同じ土俵の上で検討をしてもらうことで、交流は各々のものではなく、学級全体で行っていくものだという意識が醸成された。

### 2 課題

児童の思いや願いを基にして単元を組み立てることや、対象への意識を明確にすることで活動の質や話合いの質が高まっていく姿が見られた。一方で、児童に話合いを任せると、思いもよらない方向に話合いが進んだり、話合いがまとまりきらなかったりする場面がどちらの授業にもあった。話合いを児童に委ねる部分と教師が適切に介入して助言するタイミングに課題があり、その部分の改善が児童の問題解決への没頭をより引き出す手立てになるのではないかと考えられる。

## 5年特別活動 6年生が喜ぶような献立をつくるために

指導者：石井 知徳、三浦 久美子

### 研究の実践

#### 1 単元「6年生 卒業お祝い給食をつくろう」

#### 2 授業の実際

##### (1) 一つの単元を創ることの難しさ

単元構想の当初は、二つの案を考えていた。一つ目は、本校にはリクエスト給食がないため、卒業間近の2、3月の実施に向けて、6年生が喜ぶような給食の献立を考え、話し合う単元。二つ目は、社会科の食料生産の単元につなげて、5年C組の給食の残食による食品ロスを減らすための取組について話し合い、実践する単元。当初、二つ目の案で単元を進めていこうと考えていた。どちらの案でも栄養バランスのよい献立をつくるために5大栄養素を取り上げたいと構想していた。そのため、単元を始める前に家庭科専科に相談した。相談した時の第一声は「先生のクラスの子どもたちは、どちらの単元をやりたいと思う？どちらの単元がワクワクする？」だった。雷に打たれたような感覚に陥った。教師の進めたい方向に単元を構想していたことに気付いた。そして、すぐに目の前の子どもたちがワクワクしながら活動したり、話し合ったりすることができるのは一つ目の案だと思い、変更することにした。

単元の導入では、本校にそれまでなかったリクエスト給食に触れ、6年生のために5年C組で献立づくりを実施してみないかと提案した。子どもたちは、「自分たちでつくっていいんだ！」「なんか、楽しそう！」とガッツポーズをしたり、ワクワクした表情を見せたりしていた。中には、6年生に好きな給食のメニューを聞きたいとアンケートを作り始める姿もあった。あの時の同僚の一言が無ければ、この姿は見られなかったと感じた。

単元の2時間目、「6年生が喜ぶような給食の献立をつくろう」という目的を共有した後、アンケート結果を示した。ご飯、パン、麺それぞれに好きな6年生がいるという結果から、主食をどれにするかの話し合いが始まった。意見がまとまらないまま、授業の終盤、A児が小声でぼつりと「3食出せないのかな」とつぶやいた。思いを聞くと、「麺だけにすると、ごはん派、パン派の人たちは喜べない。だから、3食出せるなら出したい」と話した。この意見が出るだろうと今回は想定していたので、事前に栄養教諭に相談し、許可を得ていた。その場にいた栄養教諭に子どもたちが相談し、可能だと分かった瞬間、「3食つくっていいんだ！？」と驚きとワクワクでさらに意欲の高まりを感じた。その後、ごはん、パン、麺の各グループに分かれ、献立づくり始めた。

子どもたちのやりたいことを予測し、どこまで実現できるのか把握しておくような事前の教材研究の深さが大切であるとともに、子ども心に火を灯すことができるような単元を創り上げることの大切さも実感した。

##### (2) 子どもへの願いと見取りの大切さ

この単元で印象深かった児童が二人いる。

一人目はB児だ。B児は食べ物の好き嫌が多く、苦手な食材が入っていると残すことが多い。B児には、献立づくりを通して、少しでも給食に興味をもってもらいたいと願った。B児は、ご飯グループを希望し、カレーライスを中心にした献立をつくった。しかし、ただのカレーライスではない。カレーライスに入っている人参が星やハートの形になっており、説明には「当たったらラッキー」と書いていた。この案に込めた思いを聞くと、「カレーが苦手な6年生にも喜んでもらえるように考えた」と語った。まず、相手意識の高さに驚くとともに、楽しんで食べるためにはゲーム要素も必要だとB児ならではの考えを知り、私自身も学びになった。このアイデアを称賛すると、B児は誇らしげな表情を見せた。

二人目はC児だ。C児は4月当初から話し合いで自分の意見を否定されたり、思い通りにならなかったりするとふてくされてしまうところがあった。この単元を通して、相手と上手く折り合いをつける方法を身に付けてほしいと願った。しかし、授業者の心配をよそに、C児はすでに他の子どもとの折り合いの付け方を身に付けつつあった。C児は麺グループだった。麺グループは二つの班に分かれて、それぞれの意見を一つに絞る流れで進めていた。C児はカレーうどんを中心とした献立。もう一つのグループはタンメンを中心とした献立。二つの班が話し合う時、私はどちらも折り合いを付けられず、決まらないと思っていた。しかし、献立はスムーズに決まった。最初、C児が「カレーの好きな6年生が多いから、カレーうどんにした」と話した。その後、もう一方のグループが「いつも麺がすぐになくなってしまう。最後だから6年生に麺を増量して出す」と話した。その意見を聞いたC児は「その考え、最高！」と目を輝かせていた。すぐに同じグループのメンバー一人一人にタンメンでよいか確認をとり、麺グループの献立は決まった。

単元を創る時に、子どもへの願いをもって教材研究をすることで、子どもを見取るアンテナが高くなり、より目の前の子どもたちに合った手立てを講じることができると気付いた。しかし、普段の子どもの姿をよりリアルに捉えていなければ、子どもの学びも正確に見取ることができなくなってしまう。今後も、目の前の子どもたちのリアルな姿を捉えていきたい。



## 6年特別活動 迷い、悩む中で見えてきたもの

指導者：佐々木 駿斗

### 研究の実践

#### 1 単元「思いをカタチに、6Cプロジェクト」

#### 2 授業の実際

##### (1) 学級会を繰り返す中で見えてきた「光明」と「混沌」

年度初めの学級会。話し合いの場で誰かが言った。「多数決取ろうよ。もう決まらないから賛成の多い意見にしよう。」続けて「いや、それだと話し合いの意味くない？」と、また誰かが言った。司会の児童が私を見たので全員に問いかけた。「みんなはどう思う？多数決でいい？」一瞬の静寂の後に話す声が聞こえてきた。「多いものに決まるんだったら・・・」「じゃあ採用されないじゃん」「あれと一緒に手を挙げよう」という不満にも諦めにも似た声が出た。そのときに私は思った。それぞれが抱く思いや願いを「みんな」のものにするために話し合いがあるのだと。お互いの気持ちを伝え合い、よりよい意見を見いだしていくために学級会の仕方を学んで行く必要があると。その気持ちを胸に携えて今年度の研究が始まった。

ある日の学級会でA児が言った。「〇さんは音楽が好きだね。だから歌を歌うことは〇さんのためになるし、喜んでもらえると思う。」またB児は「1案と2案は似ているよ。合体させて両方できたらいいんじゃない。」と発言した。A児もB児も学級会でよく発言する児童だったが両者とも独りよがりな発言をすることが目立っていた。学級会を繰り返す中で周りからの共感を得られる技を身に付け成長を遂げていった。さらに総合的な学習の時間の経験を基にして、「お試しをすれば改善点が分かると思う」という他教科での学びを生かそうと主張をする児童も出てきた。実践を積み重ねる中で、年度当初に感じていた不安が少しずつ消えていくように思えた。自分の学級会の行い方が児童に浸透してきている手応えを感じると同時に自分自身、学級会のやり方を心得たように感じ、研究会に向けて光明が差しているとさえ思えた。

一方で、決まり切った学級会のやり方、アレンジの出来なさに具合に教材研究の楽しさを感じなくなっていた。学級会について文献などを読み漁っては学級会の「How to」ばかりに目が行っていった。そして、「混沌」とした思いが頭の中でずっと残っていた。

本時では、そんな自分の浅はかな準備や教材研究が表出した授業になった。特に、合意形成の場面で納得度メーターを使ったことは「How to」部分から着想を得ているが、割合の低い児童を置き去りにしたことは、年度当初の自分の思いを裏切る結果となった。「本当に大切なことは何か」今一度地に足を付けて考えていかなければならないと痛感させられた。

##### (2) 多様な学びの中で教師ができること

C児は普段の学級会では目立たない児童だった。必要があれば話しし、消極的という訳でもなかったが、進んで提案する存在ではなかった。そんなC児は本時で1年生との交流内容を提案する役割になった。C児は言った。「1年生がやりたいことが分からない。1年生に聞いてきてもいいですか。」この発言は本単元におけるキーワードになったので、全体に波及させた。C児を含む1年生グループは意気揚々と調査活動に乗り出していった。しかし、アンケートを採り終えたC児たちの表情は冴えなかった。「図工と一緒にやりたいらしいんだけど、内容はバラバラで、、、。」私はその迷いを学級会に挙げてみることを提案した。C児たちは気を取り直して発表スライドの作成に取り掛かった。調査活動を通して得た情報や自分たちの思いが伝わる提案ができた。その上で検討したいことを話すときC児は図工の内容について動画を紹介した。これは周りの参会者にも分かりやすかったようでその後の話し合いにもスムーズにつながった。参会者からの意見を得てC児含む1年生グループは再提案をした。自分たちの願いを叶えつつ参会者の意見も取り入れた折衷案になった。自分の提案を周りから認められたC児は達成感に溢れていた。

D児は司会こそ自分の輝ける場だと自認している児童である。周りも「Dの司会は分かりやすい。判断が的確だ」と認めている。そんなD児に本時でも司会のチャンスが巡ってきた。1週間前からD児と私で打合せをしていた。D児が言った。「これ、時間的に難しくないですか」その通りである。全てをこの時間に終わらせることは、到底不可能と判断した上で、司会原稿を作っていた。だから私は「そうだ。だから、タイムマネジメントして全員の納得度を測れるところまでこの時間ではやっていきたい。」とD児に伝えた。それができると判断した上で任せることにしたのだ。D児は目を輝かせて言った。「任せてください」

本時のD児のマネジメントは見事だった。考えさせる時間は取りつつ、状況を見て切り上げる、意見が滞りそうときには言い換える。参会者に伝えながら学級会を円滑に進めていた。しかし、思ったよりも時間が押した状況で合意形成の時間を迎えた。納得度が86%を超えたときD児が私に言った。「みんなが納得できると判断できますかね」私は言った。「D、どう思う。全体的によいと判断できれば進めていいぞ。」と。D児は少し迷ったようだったが、全体に言った。「賛成多数なので、この意見を採用します」次の日になってDに聞いてみた。「あのときどう思った？」「実際、%が低い人もいたのでどうしようかと。でも、平均値が高いって判断材料があったので。」私は恥ずかしくなった。結論ばかりを見ていた自分を。少数の意見にも目を向けようとしていたD児に改めて感服した。

2人の児童は本時の学級会で違う役割、違う立場で学びを進めていた。2人の児童が見ていた景色は全く違うものだっただろう。さらに学級会では参会者もいる。この役割の全てに手を差し伸べる、支援する教師の在り方はどうあればよかったのか。「子ども主体」という聞こえの良い言葉がある。「学級会はこういうものだ」というこれまでの常識もある。その言葉だけに拘泥せずに、全ての子どもが学びに没頭する学級会の在り方、教師の支援を今後研究していきたい。